「にとって」の生起条件と意味機能について

陸　丹

キーワード：対比、生起条件、メンタル・スペース、信念スペース、基準

1. はじめに

日本語には、複合格助詞「にとって」を伴う文がある。

(1) a.　小学１年の彼にとって、こんな複雑な計算は難しい。
　　b.　今の人にとって、携帯電話は財布だ。

(1)の各文はそれぞれ、「にとって」句[1]が表す「小学１年の彼／今の人」という「立場」[2]において、「こんな複雑な計算は難しい／携帯電話は財布だ」という判断が成立していると解釈されている。この「にとって」句を伴った文にはいくつかの特徴が見られる。例えば、基本的に名詞や、形容詞のような状態性が高いものが述語に現れることが多いこと、対比的な文脈を要求すること(杉本(2003、2006))などが挙げられる。本稿では、この対比的な文脈の必要性について再検討し、「にとって」句が表しているいわゆる「立場」をメンタル・スペース理論で捉える試みをする。

2. 先行研究と問題の所在

2.1 「にとって」句の生起条件

「にとって」句の生起条件について、もっとも詳しく記述しているのは三井(2001)である。三井(2001)は「にとって」句と共起する述語を記述し、名詞述語と共起する場合、形容詞述語[3]と共起する場合、そして非変化ナルを述語とする文と共起する場合のそれぞれの生起条件を考察している。その中に、それ以降の研究においても、かなりの重点が置かれるもっとも興味深い現象がある。

(2)　*太陽は日本人にとって赤い。

---

[1] 本稿では、「aにとって」を「「にとって」句」と呼ぶことにする。
[2]「にとって」を「立場を示す表現」とする先行研究は森田・松木(1989)、グループ・ジャマシイ(1998)などが挙げられる。
[3]三井(2001)では、「メリットがある／高くつく／役に立つ」などのような動詞文も形容詞文に準じるとされている。

(2) *太陽は日本人にとって赤い。

(3) a. 太陽は日本人にとって赤くない。

b. この太陽の色は日本人の感覚にとって赤すぎる。

(4) 太陽は日本人にとって赤い {に違いない／らしい／かもしれない}。

(2)のような文は三井(2001)において、非文とされているものであり、野村(1984)においても「いささか奇妙な印象を伴う」とされているものである。興味深いのは、このような不自然な文でも、(3a)のように否定を伴った形、(3b)のように「～すぎる」を付加した形、または(4)のようにモダリティ形式を付加した形にすると、容認度が上がることである。

(2)から(4)のような指摘を受け、杉本(2003、2006)は(3a)、(3b)に対して、「対比」を用い、(4)に対して、「にとって」句の人称制限を用い、説明を与えている。以下では(3)のような対比と関わる現象を概観し、(4)の現象については 2.2 節で概観する。

まず、杉本(2003、2006)は「にとって」句は対比の「は」と共起しなくても、「なんらかの対比的な意味合いが含まれているように感じる」と指摘し、「にとって」の対比と「は」の対比について考察している。

(5) a. *太郎にとって、この洋服は大きい。

b. 太郎にとっては、この洋服は大きい。

(杉本(2006:147))

(5a)のように非文である文の「にとって」に b 文のように対比の「は」を付加すると、容認されるようになる。この現象から、杉本(2003、2006)は「「にとって」句自体が対比的な意味を持つのではなく「にとって」句は対比的な文脈を必要とするのである。(杉本(2006:148))」と指摘している。従って、a 文のように対比対象が明確に示されていない場合でも、対比対象が暗示されるような「は」を付加することによって、許容度が上がってくる。更に、この「にとって」の対比性はキャンセルできるため、語用論的に生じたものであるとしている。

このように「にとって」句の特殊ともいえる対比性を明確にし、杉本(2003、2006)はこの対比性を用い、三井(2001)が指摘した現象を説明している。

(6) *太郎にとって、彼女は魅力的だ。

(7) 太郎にとって、彼女は魅力的ではない。

(杉本(2006:148f.))

(6)、(7)は三井(2001)で指摘された否定辞の付加によって自然さが増す現象である。杉本(2003、2006)によると、(7)は否定辞によって、「彼女を魅力的だ」と感じる太郎以外の誰

かが対比対象として捉えやすくなっているためであると説明されている。更に、三井(2001)が指摘した「～すぎる」の付加による許容度の変化も同様な説明を与えている。

(8) a. *太郎にとって、このカーテンは赤い。
b. 太郎にとって、このカーテンは赤すぎる。
(杉本(2006:150f.))

つまり、(8b)も「赤すぎない」と感じる太郎以外の誰かが対比対象として想定されているため、自然となると杉本(2003、2006)によって指摘されている。

以上のような現象から、杉本(2003、2006)は「にとって」句は対比的な文脈を必要とするとしている。しかし、実際には、対比性を必要としない現象も存在するため、本稿はそれらの現象を指摘し、「にとって」文の生起条件を考察する。これについては 3 節で詳しく論じる。

2.2 「にとって」句の人称制限

三井(2001)で指摘した(4)のようにモダリティ成分を付加することによって、「にとって」文の自然さが増すことに関して、杉本(2003、2006)は「にとって」句の人称制限と結び付け、その説明を与えている。

まず、杉本(2003、2006)は「にとって」句を二種類に分けられるとし、両者には、以下のような対照的な現象が見られると指摘している。

(9) a. 彼にとって、そんなことは簡単だ。
b. 君にとって、そんなことは簡単だ。
(10) a. 太郎にとって、彼の出世は忌々しかった。
b. #君にとって、彼はの出世は忌々しい。

杉本(2003、2006)は、(10)のようなものは「にとって」句の前の名詞を 2 人称にすると、「確認などの場合を除き、談話上、不自然になる」と述べ、(9)のように自由に置き換えられるものと比較し、「にとって」句を二種類存在すると分析している。そして、(9)は、「そんなことは簡単だ」と判断したのは「彼」ではなく、話し手であるため、それを「非判断主体タイプ」と呼び、「にとって」句はある観点を表すとしている。それに対し、(10)は、「彼の出生は忌々しい」と判断したのは必ず「太郎」でなければならないため、それを「判断主体タイプ」と呼んでいる。両者の違いは「内的な感情、感覚を表しているか(判断主体タイプ)、客観的な事実から導き出され得る判断を表しているか(非判断主体タイプ)の違いである(杉本(2006:154)」と述べている。

三井(2001)で指摘した現象に対して、杉本(2003、2006)は「判断主体タイプ」の「に

とって」句を用いて、モダリティ付加によって自然さが増す現象に説明を与えている。(例文は杉本(2003、2006)によるものである。)

(11) a. *太陽は日本人にとって赤い。
b. 太陽は日本人にとって赤い {らしい／ようだ／かもしれない／のだ}。

杉本(2003、2006)は、この場合、「赤い」は客観的な属性ではなく、主観的な感覚を述べているものであるため、人称制限がかかっており、文末にモダリティ成分を要求すると分析している[4]。

このように、杉本(2003、2006)は、「にとって」句は、「判断主タイプ」と「非判断主タイプ」、二種類あると分析している。しかし、この「判断主体タイプ」と「非判断主タイプ」の「にとって」句はどういう関係にあるのか。本稿はメンタル・スペース理論に基づき、両者を統一的に説明することを試みる。

3. 「にとって」句の生起条件

3.1 対比的な文脈の必要性の再検討

杉本(2003、2006)は「にとって」句が対比的な文脈を必要すると指摘しているが、実際にはそういった対比的な文脈を必要としない現象もある。その考察に入る前に、まず杉本(2003、2006)でいう「対比性」について触れておきたい。

まず、杉本(2003)では、「にとって」の対比性に関して、「a について P が成り立ち、かつ a 以外に P が成り立たないものが存在する可能性がある(p.88)」としている[5]。ただし、杉本(2006)では、この該当する点は触れられていないが、杉本(2006)においてもこの対比性について、以下のように述べられている。「このような場合に、敢えて判断主体や観点を明示するということは…(中略)…敢えて表現した判断主体や観点からはその言明が成り立つが、それ以外の判断主体や観点からは成り立たないという含意になるのではないだろうか(杉本(2006:156)、下線は筆者によるもの)」という部分からも分かるように、杉本でいう「対比性」とは、(「a にとって P」と言った場合)「a と~a」の対比だけではなく、「P と~P」の対比も必要であることである。つまり、杉本で捉えている「にとって」句を必要とする対比的な文脈とは「~a にとって~P」であることになる。しかし、実際にはこのような対比的な文脈を必要としない現象も考察できる。

---

[4] (10a)の例は確かにモダリティ成分が付加されていないが、過去形になっていることに注目されたい。しばしば指摘されるように、人称制限は過去形の付加によって解除されるため、(10a)は自然である。

[5] 「は」の対比性に関して、杉本(2003)は「a について P が成り立ち、かつ a 以外に P が成り立たないものがすくなくとも一つある(p.88)」とし、それを「存在的対比」と呼び、「にとって」の対比性を「可能的対比」と呼んでいる。

(12) a. 72年にパリの第17回ユネスコ総会で世界遺産条約が採択され、各地の文化遺産や自然遺産は、土地の人だけでなく全人類にとっての宝であると変わった。 (毎日 97/07/24 朝刊)

b. 一方、エリツィン大統領は同日、訪中に先立って収録されたとみられるラジオ放送を通じて、「今日はロシアだけでなく、全人類の歴史にとっても悲しい日である」と述べた。 (毎日 96/04/27 朝刊)

c. 子どもそして全ての人にとって大切なのは、神様がわたしたちを愛して下さるように、互いを必要とし認め合う心です。 (http://www.gojo-aijien.net/)

d. 恋愛などというものは自分にとっても、また自分以外の誰にとっても日常茶飯事であるに違いないと思いこんでいるかに見せかけ…(下略) (エディプスの恋人)

(12)はそれぞれ「土地の人／ロシア(の歴史)／子ども／自分」において「P」が成り立つことを意味しながら、「全人類／全人類の歴史／全ての人／自分以外の誰でも」においても「P」が成り立つことを意味しおり、これらのいずれも「~P」の想定がしにくいと考えられる。更に、以下のように「~P」を必要としないことをはっきりと示す現象が観察できる。

(13) a. *彼にとって花子は魅力的だ。

b. *太郎にとって、このカーテンは赤い。

(14) a. 彼にとっても、花子は魅力的だ。

b. 太郎にとっても、このカーテンは赤い。

(13)は三井(2001)、杉本(2003、2006)で指摘されている現象で、いずれも自然さが低いものであるとされている。しかし、(14)のように「にとって」句にとりたて詞の「も」を付加することによって、文が容認されるようになる[6]。ここでもやはり「彼以外／太郎以外」の対象にとって、「花子は魅力的でない／このカーテンは赤くない」という「~a にとって~P」が想定できず、つまり、杉本(2003、2006)の「~P」という対比文脈は必要とされないと考えられる。むしろ、ここでは「彼以外／太郎以外」の対象にとって、同じく「花子は魅力的だ／このカーテンは赤い」という文脈が必要となっていると考えられる。

以上のことから、「にとって」句が必要とするのは、杉本(2003、2006)の「~a にとって~P」といった対比文脈だけではなく、「~a にとって(も)P」といった文脈も考慮しなけれ

[6] この現象について、藤城(2005)でも考察されている。藤城(2005)は「「は」と「も」を加えることによって、「他の人にとってはどうかわからないが、私にとっては」などの意味合いが明らかになり、わざわざ受け手を想定した意図がみえやすくなる。(p.49)」と説明をしている。ここで言う「受け手」とは、藤城(2005)では「Xにとって」のXを指している。なお、杉本(2003)では、「にとっても」の用例数について触れてはいるが、それに関する詳細な考察は成されてはいない。

ばならないことが分かる。ここで注目したいのは、これらの文脈には「~a」が必ず存在し、つまり、「~a」の存在を示すために、「~P」が成立する文脈、もしくは同じく「P」が成立する文脈が要求されるのではないかと考えられることである。すると、「にとって」句は「a」以外に「~a」が必要とするということは、「にとって」句が出現した際に、その「にとって」の対象となるものが「a」だけではなく、複数存在しなければならないということになろう。ここでは、「「にとって」句の複数の対象制約」と呼ぶことにし、次節ではこれについて検討する。

3.2 「にとって」句の複数の対象制約と全称表現

「aにとってP」と言った場合、「にとって」句の対象となるものは複数存在しなければならないため、「~P」または「P」が成立する文脈を提示することによって、「~a」を明確に提示する必要性があることを前節で見てきた。この「「にとって」句の複数の対象制約」に関して、「誰にとっても」と「全ての人にとって」という全称的な表現に興味深い現象が観察される。

まず三井(2001)では「鯨は哺乳類だ／アサガオは植物だ」のような一般的真理を表す文は「にとって」句と共起できないと指摘していることに対して、杉本(2003、2006)は以下のような例を提示し、「にとって」句は一般的心理を表す文と共起可能なことを示している。

(15) a. *彼にとって、鯨は哺乳類だ。
　　 b. *太郎にとって、アサガオは植物だ。
(16) a. 誰にとっても、鯨は哺乳類だ。
　　 b. 誰にとっても、アサガオは植物だ。

(15)は要するに、一般的真理であるため、「彼／太郎」といった判断主体や観点だけを「にとって」で取り上げるのはおかしいからであると考えられる。そして、一般的真理であるからこそ、「誰にとっても」のように「全称」を表す表現、つまり「例外なく、全ての人間」を表すものが(16)のように「にとって」を伴い、文内に出現することが可能である。しかし、(16)と同様に、「例外なく、全ての人間」という意味を表す「全ての人」は「にとって」句との共起において、「誰にとっても」と非平行的な現象が見られる。

(17) a. {誰にとっても／どんな人にとっても} 鯨は哺乳類だ。
　　 b. {誰にとっても／どんな人にとっても} この問題は難しい。
(18) a. ?全ての人にとって、鯨は哺乳類だ。
　　 b. ?全ての人にとって、この問題は難しい。

(17)は「誰にとっても／どんな人にとっても」と共起しているもので、(18)は「全ての

人にとって」と共起している場合である。判定は微妙ではあるが、(18)のほうがより自然とされる[7]。これらの異なった文法性を示す原因は以下のように考えられよう。まず、(17)の場合、「wh 疑問詞＋にとって＋も」という形になっていることに注目したい。このように「wh 疑問詞＋も」という形になっている場合、奥津(1984、1985)によると「wh 疑問詞」が表している項目がとりたて詞「も」によって、関係が決められ、形式化にすると、以下のようなものになるとされている。

(19) (どれ)(も)＝
$(x_1, x_2, x_3, \ldots x_n)$(も)＝
$(x_1$ も$)(x_2$ も$)(x_3$ も$)\ldots(x_n$ も$)$
(奥津(1985:6)

すると、(17)の「誰にとっても／どんな人にとっても」の場合も同じように形式化ができると考えられよう。以下は「誰にとっても」を例にする。

(20) (誰にとって)(も)＝
$(x_1$ にとって, x_2 にとって, x_3 にとって,$\ldots x_n$ にとって)(も)＝
$(x_1$ にとっても$)(x_2$ にとっても$)(x_3$ にとっても$)\ldots(x_n$ にとっても$)$

この形式化から、「x_1 にとって」以外に、「x_2 にとって」、「x_3 にとって」などの対象が想定されており、それらの関係は「も」によって関連付けられていることがわかる。ここで注目したいのは、「も」によって複数のものが存在することが示されており、つまり、「誰にとっても」が表している対象には複数の項目が存在することである。それに対して、(18)の「全ての人にとって」はどうであろうか。まず、「全ての人」に「も」を付けることが不可能なことからもわかるように、「全ての人」が表している対象には「誰にとっても」のように複数の項目が存在しないことが考えられる。

(21) a.　全ての学生が着いた。
b. #全ての学生も着いた。

(21b)は確かに、「先生が着いた、そして全ての学生も着いた」と言った場合や、意外の「も」を表している場合は、自然とされる。しかし、これらの「も」は「全ての学生」の内部項目を関連付けるものではなく、「学生」以外のものと関連付けていると考えられる。

---

[7]母語話者 10 人中、①(17)を自然、(18)を不自然と判断するのが 7 人、②(17)、(18)両方とも自然と判断するのが 2 人、そして③(17)を不自然、(18)を自然と判断するのが 1 人である。②と③の場合はどう捉えるのかは今後課題としたい。更に、①の場合でも、大きな容認度の差が見られない理由も今後考えていきたい。

つまり、「全ての人／全ての学生」のような表現は「誰にとっても」のように内部の項目を「も」によって関係付けることができないことから、これらの表している対象には複数の項目が存在しないと考えられる。

以上のことから、(17)の「誰にとっても」は「にとって」の対象が複数存在し、かつ「も」によってその存在が示されているため、自然とされるのに対して、(18)の「全ての人にとって」は「にとって」の対象が複数存在しないため、不自然とされるのではないかと考えられる。前節の考察を含め、「にとって」句の生起条件をまとめると、以下のようになる。

(22) 「「にとって」句の複数の対象制約」
「a にとって P」といった場合、「にとって」の対象となる「a」は複数存在し、その存在は言明に示されなければならない。

ただし、(18)の「全ての人にとって」は「にとって」の対象が複数に存在しないため、自然さが低いとされるが、以下のように、「全ての人」以外の対象を明確に示していれば、文は自然とされる[8]。

(23) a. 君以外の全ての人にとっても、鯨は哺乳類だよ。
b. 言語学者以外の全ての人にとって、この問題はどうでもいいものだ。

(23)は「全ての人にとって」以外の対象は、それぞれ「君／言語学者」と提示されているため、(18)と比べ、自然さが増している。なお、a 文は「P」が成立する文脈、b 文は「~P」が成立する文脈が想定されている。

以上では、「にとって」句の生起条件とそれに関連する現象を見た。しかし、なぜ「にとって」の対象は複数存在しなければならないのか、そして、杉本(2003、2006)で分析した二種類の「にとって」句、すなわち「判断主体」と「観点」の「にとって」の関係はどうなるのかについて次節で見て行きたい。

4. メンタル・スペースと「にとって」

4.1 スペース導入表現としての「にとって」

「にとって」句を伴った文はしばしば対比文脈に現れることは既に上で見てきた。

(24) a. 実際に簡単な問題は、太郎にとって簡単でない。

---

[8] また、(18)の「全ての人にとって、鯨は哺乳類だ」の文も「宇宙人が人類のことを見て、それを発話している」という解釈が出やすいという母語話者による指摘もあった。つまり、「全ての人にとって」と言った際、全ての「人」以外の何かの対象が想定されやすいと考えられる。これもやはり、「全ての人」という表現は内部項目が存在しないことと「にとって」の生起条件によって生じた「妥当」な解釈であろう。

b.　普通の人にとってこの赤くない椅子は、(変色メガネをかけている)彼にとって赤い。

(25) a.　この簡単的な問題は、太郎にとって簡単でない。

b.　この赤くない椅子は、(変色メガネをかけている)彼にとって赤い。

上のa、b文はいずれも「(実際に)簡単な問題は(太郎には)簡単でない／(普通の人が思う)赤くない椅子は(変色メガネをかけている彼から見ると)赤い」という解釈になっている[9]。つまり、同じ「問題／椅子」でありながら、それぞれ「簡単だ／赤くない」という記述が与えられながら、「簡単でない／赤い」といった一見矛盾した記述が与えられている。そして、注目したいのは(25)の文から「にとって」を除くと、以下のように非常に不自然な文になってしまうことである。

(26) a.　*簡単な問題は簡単でない。

b.　*赤くない椅子は赤い。

(26)のこのままでは、矛盾した解釈が生じ、(25)の「にとって」を伴ったものと比べ、文が非常に不自然となっている[10]。したがって、(25)のように「にとって」と共起することによって、矛盾した二つの記述が矛盾なく解釈されるようになっていると考えられる。これはフォコニエ (1996、2000)で提案しているメンタル・スペース理論のスペース機能であると考えられる。以下では、フォコニエ (1996)で挙げている「矛盾した記述が一つの個体に与えられる」事例を見てみよう。

(27) In Len's painting, the girl with blue eyes has green eyes.
(レンの絵の中では、その青い目の女の子が緑の目をしている。)
(フォコニエ(1996:16))

(27)では、ある「女の子」は「青い目をしている」という(フォコニエでは、「属性」と呼んでいる)記述が与えられていながら、「緑の目をしている」という記述も与えられている。つまり、一見矛盾しているように思われるが、実際には解釈上まったく矛盾が生じないことはいうまでもない。フォコニエによると、このような文を理解するために、二つのスペースを想定する必要があり、それは「現実スペース」と「レンの絵のスペース」となる。そして、それぞれのスペース内に、異なった「女の子」(個体)が存在し、この異なった二人の「女の子」にそれぞれ異なった記述(この場合は、「現実スペース」に「青い目を

---

[9] (25)に関して、母語話者によって、「この簡単な問題さえ簡単でない／この赤くない椅子も赤い」のようにとりたて詞と共起させたほうがより自然とする人もいる。

[10] (26a)は「単純なことこそ難しい／醜いものこそ美しい」のような矛盾した意味を表す表現として考えれば、解釈されるが、本稿では、このような哲学的な表現を問題とせず、一般な解釈で考える場合を扱うため、ここでは非文とする。

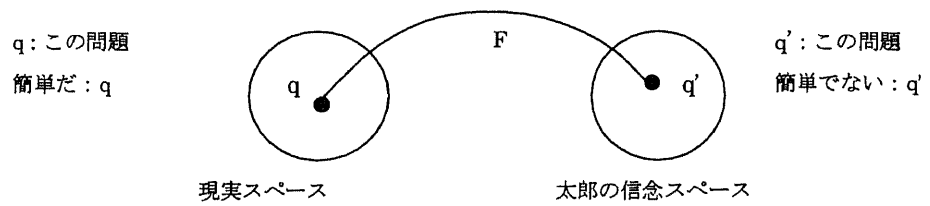
している」、「レンの絵のスペース」に「緑の目をしている」)を与える。最後に「現実スペース」の「女の子」は「レンの絵のスペース」の「女の子」と実は「同一人物」であるという保証をするコネクタによって、二人の「女の子」が結び付けられている。このように、フォコニエは「In~(~の中で)」は一つのスペース導入表現であるとしている。

そして、「にとって」をスペース導入表現の一つとして考えると、以下のような説明が与えられると考えられる。(26a)を例にし、議論を進める。

(28) この簡単な問題は太郎にとって簡単でない。 ((26a)の再掲)

つまり、(28)のような場合では、「現実スペース」には「簡単だ」という記述が与えられている「問題」が存在し、「太郎の信念スペース[11]」内に「簡単でない」という記述が与えられている「問題」が存在する。そして、この二つの「問題」は同じものであると解釈されるように、コネクタによって、同定される。フォコニエに基づいた図で表すと、以下のようになる。

(29)



(29)では、q と q'が「この問題」を表し、それぞれ「現実スペース」と「太郎の信念スペース」に存在する。そして、それぞれ「簡単だ／簡単でない」という記述が与えられ、両者の間は、F というコネクタによって、結び付けられている。更に、次のように、二つのスペースが必要とする現象もある。

(30) 太郎にとって、直美は花子だ。

まず、(30)は比喩的な解釈[12]が一般的だと思われるが、以下のような状況を与えれば、「直美という個体は花子という個体である」といった解釈も出来る。例えば、「太郎は最愛の花子が亡くなった事実が受け入れられず、花子に似ている女性、直美のことを花子であると

---

11 「にとって」が導入スペースは全てある個体の「信念スペース」であるかどうかについては、4.2 節で検討する。

12 つまり、「直美は花子のような存在だ」のような解釈の場合である。

思い続けている」といった状況を設定しておけば、(30)の解釈は「直美」と「花子」は異なる女性、すなわちそれぞれ一つの個体として解釈され、そして、この二つの個体は同一人物であるという解釈が生じる。これはいわゆる名詞句の透明な解釈の現象である。そして、フォコニエによると、このように透明な解釈現象が可能となるのはスペースが複数存在する環境である。つまり、(30)も「にとって」によって、「太郎のスペース」が導入され、その中の個体(「花子」)が「現実スペース」内の個体(「直美」)と関係が結び付けられ、「同一人物」という解釈が生じている。このように、「にとって」が新たなスペースを導入することによって、スペースが二つ存在するため、スペース間の対比が可能となる。

(31) a. この部屋は日本人にとってちょうどいいが、欧米人にとっては狭い。
b. 地球は昔の人にとって四角だが、今の人にとっては丸い。
c. 今回の優勝は監督にとって5回目になるが、私にとっては初めてだ。

(31)のいずれも一般的に見られる対比の意味を表す文である。たとえばa文は「日本人のスペース」にも「欧米人のスペース」にも存在する「部屋」に対して、それぞれ「ちょうどいい」と「狭い」という記述を与えている。そして両スペース内の「部屋」はコネクタによって結ばれている。b、c文も同様に考えられる。

以上のことから、「にとって」句はスペースを導入する表現であることを確認した。スペースが導入するということは、もともと存在するスペース(多くの場合は「現実スペース」)を含み、スペースが複数になり、つまり、「にとって」の対象が複数になることもこれで説明できる。更に、この複数のスペースの関係、つまり「にとって」の複数の対象の関係は、杉本(2003、2006)で指摘した対比文脈によって関係付けたり、または本稿で指摘した「も」の付加によって関係を結び付けたりすることが可能である。

ここまでは「にとって」を一括して扱っているが、杉本(2003、2006)で指摘した二種類の「にとって」句とどう関連し、どう考えれば良いのかについて、次節で検討したい。

4.2 「判断主体タイプ」と「非判断主体タイプ」

2.2で述べたように、杉本(2003、2006)は、「判断主体」を表すか、表さないかによって、「にとって」を判断主体を表す「判断主体タイプ」と観点を表す「非判断主体タイプ」に分け、その両者において、以下のような対照的な現象を示すと指摘している[13]。(用例は筆者の作例である。)

(32) *花子にとって教頭先生は怖いらしいが、本人はそう思っていない。

[13] 杉本(2003、2006)は、「非判断主体タイプ」を表す「にとって」のみこのような文脈との共起現象を提示している。

(33)　太郎にとって、そのぐらいの仕事は簡単だが、本人はそう思っていない。

(32)の「判断主体タイプ」は判断主体を表しているため、当然「本人はそう思っていない」のような判断主体がその判断を下していないと表す表現と共起できない。それに対して、(33)の「非判断主体タイプ」は判断主体を表さないため、このような表現と共起できる。つまり、「判断主体タイプ」は「aにとってP」と言った場合、「aはPと思っている」という意味を表している。したがって、この「にとって」句が表しているスペースとは、「思う」動詞が導入しているある個体の「信念スペース」になると考えられよう。当然まったく等価であるとは考えないが、これについて今後の課題としたい。

それでは、「非判断主体タイプ」の「にとって」句はどんなスペースを導入しているのであろうか。(33)の現象からわかるように、「判断主体タイプ」の「信念スペース」と同様に扱うには問題がある。ここで三井(2001)の指摘に注目したい。三井(2001)は「にとって」句を「～からみて／～からすると」という表現に置き換えることが可能なことを指摘している。

(34) a.　彼にとって、そんなことは簡単だ。
　　 b.　彼の能力からみて、そんなことは簡単だ。
(35) a.　ルーキーにとって、すぐ結果を出すことは難しい。
　　 b.　ルーキーの力からすると、すぐ結果を出すことは難しい。
(三井(2001:25))

(34)、(35)はいずれも、杉本(2003、2006)で指摘している「非判断主体タイプ」のものである。そして、以上の例からはいわゆる判断の「基準」を表しているように思われる。つまり、「彼にとって／ルーキーにとって」といった場合、「彼／ルーキー」が導入したスペースはある個体の基準に基づいた「基準スペース」であると考えられよう。しかし、こういった「基準」も一つのスペースとして扱うと、「基準」を表す表現もスペースの想定が必要となってくるとも考えられる。これについては更なる検討が必要であるが、ここでは「にとって」句が表す「基準」と一般的に「基準」を表す表現の「基準」の違いを触れておきたい。

(36)・ここから駅は遠い。

(36)の「ここから」はいわゆる基準を表す表現であり、この基準では、「駅は遠い」ということを表している。しかし、この基準は「にとって」が表している基準とは大きな違いがあるようにも思われる。

(37) a.　この複雑な計算は太郎にとって、簡単だ。
　　b. ?? 近い駅はここから、遠い。

つまり、「にとって」の場合は矛盾した記述を一つの個体に与えることが可能であるのに対して、bのような場合は不可能である。これはやはりスペースとして、「にとって」句を捉えたほうが妥当であることを示唆している。もちろん、この「基準スペース」の性質、(36)で挙げた基準を表す表現との関係についてはまだ明確にされていではないため、今後詳しく考察していきたい。

5. まとめ

本稿では、「にとって」句の生起条件を再検討し、「「a にとって P」と言った場合、「にとって」の対象となる「a」が複数存在し、その存在は明確に示されなければならない」という「「にとって」句の複数の対象制約」を提案した。そして、「にとって」をメンタル・スペース理論でいうスペース導入表現であると分析し、それによって、「複数の対象」、つまり、「複数のスペース」の存在の理由を検討した。更に、杉本(2003、2006)で分類された二種類の「にとって」が導入するスペースについて検討を行った。しかし、この二種類の「にとって」が導入する「スペース」の詳細については十分に考察を行えなかったため、今後の課題としてしたい。

【用例出典】

『CD-ROM 版新潮文庫の 100 冊』(新潮版)
　筒井康隆『エディプスの恋人』
『CD-毎日新聞』1993～2002 年版

【参考文献】

奥津敬一郎(1984)「不定詞の意味と文法ー「ドッチ」についてー」『都大論究』21, 東京都立大学国語国文学会, pp.1-16
奥津敬一郎(1985)「続・不定詞の意味と文法」『人文学報』173, 東京都立大学人文学部, pp.1-23
グループ・ジャマシイ(1998)『教師と学習者のための日本語文型事典』くろしお出版
佐伯哲夫(1966)「複合格助詞について」『言語生活』178, 筑摩書店, pp.80-87
杉本　武(2003)「複合格助詞「にとって」について」『文芸言語研究　言語篇』44, 筑波大学, pp.79-100
杉本　武(2006)「複合格助詞「にとって」の意味と文法機能」藤田保幸・山崎誠編『複合辞研究の現在』和泉書院, pp.137-167
砂川有里子(1987)「複合助詞について」『日本語教育』62, pp.42~55
塚本秀樹(1991)「日本語における複合格助詞について」『日本語学』10-3, 明治書院, pp.78-95

沼田善子(2006)『現代日本語とりたて詞の研究』筑波大学博士論文
野村剛史(1984)「~にとって/~において/~によって」『日本語学』3-10, 明治書院, pp.60-66
フォコニエ, ジル(1996) 『メンタル・スペース:自然言語理解の認知インターフェイス』坂原茂、水光雅則、田窪行則、三藤博(訳), 白水社(Fauconnier, Gilles (1994) Mental Spaces: aspects of meaning construction in natural language, MIT Press)
フォコニエ, ジル(2000) 『思考と言語におけるマッピング』坂原茂、田窪行則、三藤博(訳), 岩波書店(Fauconnier, Gilles (1997) Mappings in Thought and Language, Cambridge University Press.)
藤城浩子(2005)「「にとって」文の機能と成立条件」『東京大学留学生センター教育研究論集』14, 東京大学留学生センター, pp.35-55
松木正恵(1990)「複合辞の認定基準・尺度設定の試み」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』2, 早稲田大学, pp.27-52
三井正孝(2001)「ニトッテ格の共起条件」『新潟大学国語国文学会誌』43, 新潟大学, pp.12-38
森川結花(2006)「複合辞「にとって」の注釈・含意機能と言語現象」『大阪樟蔭女子大学日本語研究センター報告』14, 大阪樟蔭女子大学日本語研究センター, pp.1-16
山岡政紀(2000)『日本語の述語と文機能』くろしお出版